

可能文と自動文：動作主の介在に注目して

著者	横内 美保子
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 8: 35-53 (1996)
発行年月日	1996-10-31
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022409

可能文と自動詞文

—動作主の介在に注目して

横内 美保子

0. はじめに

いわゆる可能動詞（〔子音動詞語幹+e-ru〕形式の一段活用動詞）を用いた可能文と、その可能動詞と同形の自動詞を用いた自動詞文とはしばしば混同される。それは、それぞれに用いられる動詞が同形であるためばかりではない。両者は統語的にも意味的にも類似した特徴をもつからである。

では、その差異はどこにもとめられるのであろうか。本稿では、特に人間動作主の介在の有無に注目し、可能文と自動詞文の異同を明らかにしたい。

なお、ここで対象にする可能文とは可能動詞を用いたもの、自動詞文とは可能動詞と同形態の自動詞を用いたものに限定する。

1. 統語的特徴

本章では、可能文と自動詞文の統語的特徴を概観し、両者の差異および連続性を明らかにする。

1-1. 格構造とゼロ代名詞

本稿が対象にする可能動詞は、先に述べたとおり、〔子音動詞語幹+e-ru〕形式をもつ。例えば、他動詞「焼く」から派生する可能動詞は「焼ける」であるが、これは、他動詞「焼く」に対応する自動詞「焼ける」と同形である。

これらの動詞を用いた例文を以下に示そう。

(1) あの人は、大変上手にパンを焼いた。

(2) あの人は、大変上手にパンが焼けた。

(3) (あの人が焼いたので、) 大変上手にパンが焼けた。

以上のうち、(1)が他動詞文、(2)が可能文、(3)が自動詞文であるのは明白である。ところが、(2)と(3)とは、アンダーラインの部分に限れば、表層では全く見分けがつかない。また、(2)の文中の「パン」も(3)の文中の「パン」もその意味役割はともに「対象」である。このような事情から、

なる。

これに対して、以下の(10)'は、文レベルでは表面上(7)'と区別がつかないが、そのゼロ代名詞は文脈指示的なものである。つまり、(10)の「太郎」が省略されたものであるから、当然、(8)のような可能文は想定できない。

(9) 太郎が割り箸を割る(こと)。〔Aタイプ〕

(9)' pro割り箸を割る(こと)。

(10) 太郎に割り箸が割れる(こと)。〔Bタイプ〕

(10)' pro割り箸が割れる(こと)。

さて、C・Fで、その文中の可能動詞および自動詞の表す状態あるいは事態が他者の動作・行為を受けた結果であれば、その動作とはA文中の他動詞が表す動作である。したがって、前述のとおり、CのY³・FのY⁵は、ともにAの目的語Y¹と一致し、その意味役割は「対象」である。

(11) 可能動詞 ← 他動詞 ↔ 自動詞
 「割れる」 「割る」 「割れる」

このタイプの可能動詞・自動詞には、この他、以下のようなものがある。「焼ける、切れる、取れる、売れる、折れる、ちぎれる、破れる、振れる、剥げる、脱げる、砕ける、裂ける、解ける、溶ける、抜ける、剥ける」など。

1-2. 先行研究と問題点

本節では先行研究をとりあげ、その問題点について考察する過程で、次の2点を明らかにしたい。まず1-2-1では、可能文のなかには「性能可能」とも呼び得るものがあること、およびその統語的特徴について述べる。次に1-2-2では、動作主の介在に注目し、可能文と自動詞文との差異は、実質的な動作主が想定され得るか否かにもとめられるという考えを示す。

1-2-1. 森田説と「性能可能」

森田(1988:1215)は、以下の(12)のようにDタイプの格構造をもつものは可能文であるが、(13)のように目的語をとることができないEタイプのものは自動詞文であると述べている。また、(12)の「切れる」は意志性が強い動詞であるが、(13)の「切れる」は無意志性で、「鋭利だ」という意味であるという。なお、以下の(12)・(13)は森田(同書)による。

(12) この鋸は鉄がよく切れる。(…Dタイプ→可能文)

(13)この鋸はよく切れる。(…Eタイプ→自動詞文?)

もし森田(同書)のいうように(13)が自動詞文であれば、前節でみたとおり、(13)の「この鋸」を目的語にとる他動詞「切る」を述語とする他動詞文が想定される筈である。しかし、次のように(13)は対応する他動詞文が想定しにくい。

(14)? Xはこの鋸をよく切る。

このことだけからも(13)が自動詞文であることは疑わしい。

次に、(12)の「この鋸」の意味役割が「道具」であることに注目しよう。

(12)' a [人々・人間・われわれ]がこの鋸で鉄をよく切ること。

b PROこの鋸で鉄をよく(＝うまく／上手に)切ること。

c PROこの鋸で鉄がよく(＝うまく／上手に)切れること。

このように、(12)の「切れる」が意志性の強い動詞であるのは、(12)の背後に潜在する、実質的な人間動作主(PRO)の意志の反映であると考えられる。

では、(13)の場合はどうだろう。筆者は、(13)も(12)と同じ格構造をもつと考える。以下の(13)'のように、目的語の位置にもゼロ代名詞(＝あらゆるもの)を想定するのである。つまり、(13)は(12)と同様、「この鋸」の性能を述べる(5)-Dタイプの可能文(注3)であるが、(12)がその対象を特定しているのに対し、(13)はその対象を限定していないのだと考えるわけである。

(13)' a PROこの鋸で ϕ よく(＝うまく／上手に)切る。

b PROこの鋸で ϕ よく(＝うまく／上手に)切れること。

すると、(13)は「この鋸はあらゆるものがよく切れる」という意味だと解釈され、森田(同書)の「鋭利だ」という解釈と矛盾しないことになる。

では、(13)'で目的語の位置に想定したゼロ代名詞は総称的なものなのだろうか。実はそうとは言い切れないのである。上述のとおり、「あらゆるもの」という意味だとしても、その「あらゆるもの」とは、「鋸で切る」対象として考えられる範囲内での「あらゆるもの」なのである(注4)。

以下に(13)と同タイプの可能文を挙げるが、それぞれの目的語の位置に想定されるゼロ代名詞も、これと同様、その道具を用いる場合に(注4)、その対象として考えられる範囲内での「あらゆるもの」である。

(15)この鍋はよく煮える。

(16)このトースターはよく焼ける。

(17)この皮剥きはよく剥ける。

(18)この毛抜きはよく抜ける。

また、このタイプの可能文はCタイプの可能文と同様、一般に文頭の名詞句が題目化され、その名詞句の属性を述べる属性叙述文(注5)となる。

しかし、時には、事態実現を表す事象叙述文(注5)も想定され得る。

(13)"ほら、この鋸はこんなによく切れるよ。

ちなみに寺村(1982:275)は、可能表現は状態性の表現であるから、特殊な場合を除いて「～テイル」形式がとれない。よって、「～テイル」形式がとれない(13)のようなものは可能であると述べている。しかし、次節2-3でみるとおり、(13)"'のように「～テイル」形式がとれる可能表現もある。

(13)"'この鋸は、あの頃はよく切れていたのになあ。(事態実現の反復)

したがって「～テイル」形式がとれるか否かは可能であるかどうかの判定基準とはならない。

1-2-2. 高橋説と動作主の介在

ここでは、以下に述べる高橋説に反対する立場を明らかにし、その根拠を述べるが、論に入る前に、予備知識として「実現系可能」と「潜在系可能」について簡単に説明しておきたい。

1-2-2-1. 実現系可能と潜在系可能

渋谷(1993:14)は、可能の意味を、ある動作が実現することを含意するか否かによって、二つに大別し、前者を「実現系(actual)の可能」、後者を「潜在系(potential)の可能」と呼んでいる(注6)。

実現系可能は、「様々な条件によって、ある動作を実現することが可能・不可能である・あった(=実現する・した:実現しない・しなかった)」ことを表す。なお、以下の(19)・(20)は渋谷(同書)による。

(19)三日かかってようやくレポートが書けた。

一方、潜在系可能は、「様々な条件によって、ある動作を実現することが、やる(やった)かどうかは別にして、潜在的に可能・不可能である(あった)」ことを表す。

(20)僕にはたとえ三日かけてもレポートなんか書けない。

以上、実現系可能と潜在系可能について説明した。このように両者を峻別することが、以下の分析に有用であると考えられる。

1-2-2-2. 高橋説の概要と問題点

奥田(1986:194)は、「することができた」というかたちを述語とする文の文法的な意味は、「／ にはない手が期待し、意図的につとめる、にはない手自身の動作・状態の実現／というふうに規定しておいて、おおきくはくるわないだろう」と述べている。

高橋(1991:38)は以上の奥田(同書)説をふまえ、「可能動詞と、それと同形の動詞は、『することができる』にいいかえることができるものと、できないものというかたちで、ふたつにわけることができる。」と述べている。

しかし、このようなテストにより可能動詞と自動詞とを峻別することは無理であると考えられる。その根拠を以下に示す。

高橋(同書)は、「次の前三例が『～をすることができる』に言い換えることができるのに対して、後三例はそれができない。」と述べている。つまり、(21)～(23)は可能文、(24)～(26)は自動詞文だというのである。

(21)～(26)は高橋(同書)による。アンダーラインも同書のものである。

(21)問題がとけた。

(22)ケーキがうまくやけた。

(23)もうすこしまってください。もうすぐかけます。

(24)昨夜の火事で、いえが十軒やけた。

(25)ガラスがわれる。

(26)ボタンがとれそうだ。

この判別方法は、意味的にほぼ一致する別の形式に言い換えられるか否かということが基準になっている。しかし、そのことには疑問がある。

まず、(21)～(26)の主語の意味役割は、(23)もふくめて、すべて「対象」である。また、すべてが事象叙述文である。ということは、可能文であれば、ふつう属性叙述文として表されるCタイプのものとは考えられない。すると想定され得る可能文は、Bタイプのもののうち、動作・行為の実現を含意する実現系の可能文のX²が省略されたものであるということになる。そうであれば、X²の位置に文脈指示的なゼロ代名詞が想定される筈である。

したがって、例文のうち、テキストの中で固有の動作主が想定され得るのが可能文である、と考えていいのではないだろうか。(21)～(26)のうち、その可能性のあるのは、(24)を除いた他の5例である。いや、(24)も特殊な

文脈を想定すれば、可能文と考えられないこともない。よって、(21)～(26)の例文が可能文であるか自動詞文であるかは、文脈の中で判断すべきことであり、例文だけでは判断できないのである。

このことから、より一般的に、可能文と自動詞文の差異は、実質的な動作主がどれくらい顕在的あるいは潜在的かの差異に帰着されるというのが本稿の分析である。

1-1で述べたとおり、Fタイプの自動詞文のY⁵も、それと対応する他動詞の働きかけを受けるものである場合がある。しかし、自動詞文は、その働きかけをする動作主X¹には無関心である。そして、自動詞文の表している事態が、X¹の働きかけを受けた結果もたらされた事態であっても、その事態は、あたかも自然に生じたものであるかのように表現されるのである。それは、可能文が、たとえその文中に動作主が顕示されていなくても、その背景には、動作主の存在が想定されるのと対照的である。可能文の述語動詞が可能の形を備えているのは、その存在の反映にほかならない。

1-3. 可能文・自動詞文の連続性

前節の最後に、実質的な動作主の介在の有無が可能文・自動詞文の判定基準となるとの考えを示した。ところが、一方で、①Bタイプの可能文の実現系のもののうち動作主X²がゼロ代名詞に置き換わったものと、②Cタイプの可能文は、自動詞文と意味的に連続しており、可能文・自動詞文とも同じ文脈に出現し得るという問題がある。その場合、両者の境界は判然としない。

まず、①Bタイプの可能文の実現系のものからみることにしよう。

(21)'	a pro問題がとけた。	・・・可能文
	b pro問題をといた。	・・・他動詞文
	c 問題がとけた。	・・・自動詞文

例えば、上の可能文(21)' aは、bおよびcを含意している。

「問題がとけた」(c自動詞文)のは、動作主(pro)が問題を解いた(b他動詞文)結果であり、それらは動作主が問題をとくことができた(a可能文)ということに収斂される。つまり、このタイプの可能文・他動詞文・自動詞文は、それぞれ別の側面から同一の事象を表しているのである。

以下の例文の述語は、いずれも可能動詞とも自動詞ともとれるものである。

(27) 3時間もかかったが、ついに問題がとけた。

(28) 今まで成功したためしがないのに、どういう訳か今日はケーキがうまく焼けた。

(29) 随分てこずったが、やっとボタンがとれそうだ。

次に、②Cタイプの可能文と自動詞文との連続性を検討する。

Cタイプの可能文は、既に述べたとおり、対象 Y^3 の属性を表す、潜在系専門の可能文である。一方で、Fタイプの自動詞文も、対象 Y^5 を題目化すれば、その Y^5 の属性を表すことができる。例えば、以下の(30)は、(30)'に示すとおり、可能文とも自動文とも解釈できる。

(30) この紐は簡単に解ける。

(30)' a この紐は(誰にも)簡単に解ける。[Cタイプの可能文]

↑ ↓

b この紐は(スリと)簡単に解ける。[Fタイプの自動詞文]

これも、紐の同じ属性を、視点を変えて表現したものである。これと同様の例文を以下に挙げる。

(31) この糸は縫いそこなっても、簡単に抜ける。

(32) 鶏の卵は5分で焼ける。

以上みてきたとおり、固有の主語が想定されるか否かの判断は、実際には難しい場合がある。

このことは、可能動詞の出自を自動詞とする、坂梨(1969)らの説(注7)と符合する。坂梨説によると、可能動詞成立の過程は、次のようになる。

他動詞 → 対応する自動詞 → 可能動詞

これにより、(11)とは異なり、可能文と自動詞文の連続性がはっきりする。

2. 意味的特徴

ここでは、可能文と自動詞文の意味的特徴の異同を明かにしたい。そのために、まず、可能動詞・自動詞の意志性・状態性について検討し、両者を比較する。次に、可能文と自動詞文双方の実現系・潜在系両用法における、「～テイル」形式の意味的特徴に注目することにしよう。

2-1. 意志性

ここで対象としている自動詞には、意志性は全く感じられない。(11)に挙げた自動詞はすべて、照応表現にソウナルが用いられる。

(33) 太郎の傘の骨が折れた。次郎のもそうになった。

(34) 花子の三つ編みがはらりと解けた。咲子の三つ編みもそうになった。

また、命令・禁止・意志形をとることもできない(注8)。自動詞文の主語にたつ名詞句の意味役割は「対象」であるから、これは当然のことである。

では、可能動詞はどうだろうか。ここでは、可能動詞派生以前の他動詞の意志性を検討してみよう。まず、(11)に挙げた自動詞に対応する他動詞はすべて、照応表現にソウスルが用いられる。

(35) 太郎の傘を折った。次郎のもそうした。

(36) 花子の三つ編みを解いた。咲子の三つ編みもそうした。

また、命令・禁止・意志形をとることもできることから、すべてのものに意志性が認められると考える(注9)。ただし、その意志性は動作主に由来するものであるから、CおよびD・Eタイプの可能文に用いられる可能動詞の意志性は、 Y^3 および $Z^1 \cdot Z^2$ に属するものではないことになる。これが、 X^2 動作主のもつ意志を反映していることは前述の通りである。

以上、本節では、自動詞が<－意志性>、可能動詞の派生源である他動詞が<＋意志性>であることを述べた。

2-2. 状態性

ここでは、井島(1991:152)が設けた基準に従い、まず、可能表現が状態性の表現であるか否かを検討する。その際に、先に提示した、実現系可能および潜在系可能ごとに調べる。井島(同書)は以下のすべてのテストにおいて、可能表現が状態性の表現であることが裏付けられたとしているが、果たしてそうだろうか。テスト基準そのものの整合性も検討してみたい。

次に、自動詞文についても同様に状態性を検討する。もっとも、今回対象にしているFタイプの自動詞文は、<－状態性>であろうという予測がつく。先にみたとおり、このタイプの自動詞文は、動作主を文中に明示することが形式的に不可能であるものの、「動作主 X^1 が対象 Y^1 に働きかける」Aタイプの他動詞文を前提にすれば、その帰結として、「 $Y^1 (= Y^5)$ にある事態が生じる」ことを表すからである。しかし、確認のため上記の方法で自動詞文の状態性をも順次検討することにする。

ただし、テンス・アスペクトの問題は、次節2-3で詳しくみるので、ここでは取り上げない。

なお、以下、[] 内に井島の設けたテスト基準をそのまま提示し、次に筆者の観察および例文を記す。また、可能文については、(52)・(53)以外の例文では、“a”は潜在系であることを、“b”は実現系であることを表す。

①<+状態性>なら、[裸形で現在を表すことができる]

まず、上記の[] 内の表現は紛らわしい。アンダーラインの部分があるために、「裸形で現在を表すことさえできれば、他のテンスを表した場合にも<+状態性>と判断できる」とも解釈されるからである。アンダーラインの箇所は削除すべきであろう。なお、アンダーラインは筆者が施した。

さて、潜在系可能は確かに裸形で現在を表すが、実現系可能は動作性の動詞文と同様、未来を表す。

(37)a. 作り方を習ったから、私はケーキが焼ける。[現在]

b. 暇になったから、これでやっと私はケーキが焼ける。[未来]

この点では、aのように潜在系可能は<+状態性>で、bのように実現系可能は<-状態性>であると考えていいだろう。

これに対して、自動詞の場合は、以下のとおり、基本形で未来の動作を表し、実現系可能同様<-状態性>あると考えられる。

(38)太郎の傘の骨はもうすぐ折れる(だろう)。

(39)いまに障子が破れる(だろう)。

ただし、久野(1973:79)のいうように、状态的ではない動詞文でも、習慣的動作・普遍的動作に関しては、現在を表すことができる。以下は、いわば、動作性動詞の潜在的用法とでもいったものかもしれない。

以下の(40)・(41)は久野(同書)による。

(40)太郎は毎日ここに来る。[現在の習慣的動作]

(41)人間は遅かれ早かれ死ぬ。[現在の普遍的動作]

なお、1-3でとりあげた、Cタイプの可能文と連続する自動詞文も、これに類する潜在系のものである。

②[時間を表す副詞句は共起しにくい]

まず、上記[] 内の「時間」は、厳密には「期間」とすべきである。

さて、潜在系可能では確かに期間を表す副詞句は共起しにくい、実現系可能では期間を表す副詞句が共起する場合もある。

(37)a 作り方を習ったから、私はケーキが焼ける。

a' *(作り方を習ったから、)私はケーキが3時間焼ける。

b 暇になったから、これでやっと私はケーキが焼ける。

b' (暇になったから、) 私はケーキが3時間も焼ける。

よって、潜在系可能は<+状态的>、実現系可能は<-状态的>である。
自動詞とは、以下のように、共起しない。

(42)* 箸が3時間折れる。

(43)* 爪が5分剥げた。

しかし、このような自動詞と期間を表す副詞句が共起しないのと、状態性の表現と共起しないのとは、正反対の理由によるものであると考える。状態性の表現と共起しないのは、ふつう、その状態が恒常的なものであるととらえられるからであろう。それに対して、このような自動詞は、いわゆる変化動詞であり、動詞の表す事態の出来が、瞬間的に完了するものである。したがって、この基準にかなうということは、却って、これらの自動詞文が「出来事」の表現であるということの証明である、と受け取れる。ここでは自動詞文の極めて<-状态的>、<+動作的>な面がみうけられるのである。

よって、この②が状態性の判定基準としての確なものであるか疑問である。

③ [… (ヨウニ) ナル／スルの形で変化を表す動詞に変換することができる]

以下のように、潜在系可能・実現系可能はともに、変化を表す表現に転化する。しかし、潜在系可能と実現系可能とでは、その変化する内容が異なる。潜在系可能は様態（能力獲得へ）の変化を、実現系可能は事象（事態実現へ）の変化を表している。

(37)' a 私はケーキが焼けるようになった。

b 友達がオーブンを貸してくれたので、私はケーキが焼けるようになった。

一方、自動詞は、以下のように変化を表す表現に転化することはない。

(44)* 台風で細い枝がすべて折れるようになった。

(45)* コップをうっかり落としてしまったが、幸い割れないようになった。

④ [比較の基準(ヨリ)や、程度副詞、程度を表す数量詞と共起することができる]

以下のように、共起する場合もしない場合もある。

(46) a 私は器用なので、洋子よりずっと速く野菜が切れる。

b 競争してみたら、私は洋子よりずっと速く野菜が切れた。

(47) b *今日は風がなかったので、私は花子よりゴミがずっと安全に焼けた。

(46)は、潜在系可能とも実現系可能とも共起する例であるが、いずれも動作・行為の実現が動作主の能力によって可能であることを表すものである。

一方、(47)のように動作・行為の実現が動作主以外の外的条件によって可能であることを表すものとは、共起しにくいようである。

これに対して、自動詞の場合には、(48)・(49)のように、内的な条件を設定しても不自然なものが多い。

(48)? この箸は細いから、あの箸よりはるかに折れる。

(49)? 鶉の卵は殻が薄いから、鶏の卵よりずっと割れる。

しかし、(50)は特別に内的条件を設定しなくても自然に共起する。

(50) この本はあの本よりはるかに売れる。

これは、「この本」・「あの本」が一冊ずつのものではなく、同種類の本が多数存在することから、「はるかに」が様態の程度ではなく、頻度の程度と解釈されるからであると考えられる。

したがって、ここでも、自動詞の<状態性>が確認できる。

⑤ [照応表現には、<動作性>の述語にはソウスルが、<状態性>の述語にはソウダが用いられる]

意志的な動作性の動詞文(51)ではソウスルが用いられるのに対して、(37)は潜在系可能・実現系可能とも、以下のように、確かにソウダが用いられる。

(51) 太郎は早めに宿題を済ませた。次郎もそうした。

(37) a 作り方を習ったから、私はケーキが焼ける。洋子もそうだ。

b 暇になったから、これでやっと私はケーキが焼ける。洋子もそうだ。

しかし、動作的な出来事ではあっても無意志的な動詞文の中には、以下の(52)・(53)のようにソウスルが用いられず、ソウナルが用いられるものもある。また、ソウダも用いられないことはないということも指摘しておきたい。

(52) a *紅葉の葉が散った。楓の葉もそうした。

b? 紅葉の葉が散った。楓の葉もそうだった。

c 紅葉の葉が散った。楓の葉もそうになった。

(53) a *私はつまずいて転んだ。洋子もそうした。

b? 私はつまずいて転んだ。洋子もそうだった。

c 私はずまずいて転んだ。洋子もそうになった。

本稿の対象とする自動詞文も、以下のように、ソウナルが用いられる。

(54)私の櫛の歯が、ぽろりと欠けた。母のも、そうになった。

(55)親指の爪が剥げた。中指の爪もそうになった。

状態性の強いものから、ソウダ>ソウナル>ソウスル と考えてよければ、この基準においては今回対象とする自動詞文は<+状態性>と<+動作性>との間に位置するものであるということになる。

ただし、先にみたとおり、この判定基準には<意志性>も絡んでいるため、ここで結論を出すのは早計であると考ええる。

さて、以上の⑤をみるかぎりでは、可能表現は潜在系・実現系ともに<+状態性>であるといえる。しかし、①～④での観察は、それとは別の側面を提示している。それは、潜在系可能と実現系可能とは、<状態性>という意味特徴に関して、極めて対照的な性格を呈するということである。潜在系可能が<+状態性>であるのに比して、実現系可能は<-状態性>に傾いているのである。よって、次のように考えていだろう。

(56)

	状態性
可能文 潜在系	+
可能文 実現系	-
自動詞文	-

2-3. 「～テイル」形式における意味的特徴

ここでは、可能文と自動詞文の「～テイル」形式における意味的特徴を比較する。なお、考察の対象とする可能文は、前節までと同様、自動詞文と混同されやすい⑤-B・C・D・Eタイプのものに限る。また、考察にあたり、可能文・自動詞文とも、潜在系・実現系の各用法ごとに考えてみる。

2-3-1. 可能文の場合

①Bタイプの可能文

a. 潜在系

「～テイル」形式がとれない。

(46)' *私は器用なので、野菜が速く切れている。

b. 実現系

「～テイル」形式が成り立つ場合、事態実現の反復の意味にしかない。

(57)イチローはこのごろよくバットが振れている。

②Cタイプの可能文

a. 潜在系

「～テイル」形式がとれない。

(58)*この千代紙は和紙なので、とてもきれいに折れている。

(59)*この釘は打ち損なっても簡単に抜けている。

b. 実現系は想定できない。

③D・Eタイプ

a. 潜在系

「～テイル」形式がとれない。

(60)*この鋏は針金が切れている。

(61)*あの包丁はよく切れている。

b. 実現系

もし想定できるとしても(13)"' a・(60)'のように事態実現の反復か、
(13)"' bのように事態実現の継続の意味にしかない。

(13)"' a この鋸は、あの頃はよく切れていたのになあ。

b ほら、この鋏はこんなによく切れているよ。

(60)' この鋏は、以前は針金が切れていた。

2-3-2. 自動詞文の場合

a. 潜在系

「～テイル」形式がとれない。

(62)*風船はちょっとしたことですぐ割れている。

(63)*ストッキングは爪がひっかかっただけですぐ破れている。

(64)*困ったことに、この糸はすぐ切れている。

b. 実現系

以下のように様々な意味を表す。

(65)思ったとおり、食器が全部割れている。[事態実現の結果の存続]

(66)家が、目の前で焼けている。[事態実現の継続]

(67)犬の冬毛が、この頃、どんどん抜けている。[事態実現の反復]

(68)私の家は、一度火事で焼けている。[パーフェクト]

2-3-3. 可能動詞・自動詞の比較

テンス・アスペクトによる意味的特徴をまとめる。

(69) 【動作動詞】	実現系	潜在系
基本形	未来における動作・行為	現在の習慣・恒常的事実
過去形	過去における動作・行為	過去の習慣
「～ている」形式	○	○

(70) 【状態動詞】	実現系	潜在系
基本形	未来における状態	現在の状態・属性・習慣
過去形	過去における状態	過去の状態・属性・習慣
「～ている」形式	×	×

(71) 【可能動詞…Bタイプ】

	実現系	潜在系
基本形	未来における事態の実現	現在の属性・恒常的事実
過去形	過去における事態の実現	過去の属性
「～ている」形式	○	×

(72) 【可能動詞…Cタイプ】

	実現系	潜在系
基本形		現在の能力・性能・属性
過去形		過去の能力・性能・属性
「～ている」形式		×

(73) 【可能動詞…D・Eタイプ】

	実現系	潜在系
基本形	未来における性能の実現	現在の性能・属性
過去形	過去における性能の実現	過去の性能・属性
「～ている」形式	○	×

(74) 【自動詞】

	実現系	潜在系
基本形	未来における事態の実現	現在の属性・恒常的事実
過去形	過去における事態の実現	過去の属性
「～ている」形式	○	×

以上のように、可能文に用いられる可能動詞は、テンス・アスペクトによる意味的特徴が、実現系・潜在系両用法において自動詞と一致する。両者とも、実現系では動作動詞的な意味特徴を、潜在系では状態動詞的な意味特徴を呈するのである。1－3でみたように、時として可能文と自動詞文との境界が判然としないのは、このような事情も反映していると考えられる。

3. おわりに

本稿では、可能文と自動詞文の一致点および相違点をみてきた。その結果、以下のことが提示できたと思う。

- ① 自動詞文と混同されやすい可能文には、次のようなものがある。
 - (i) 「Xニ／ガYガ可能動詞」の動作主Xがゼロ代名詞に置き換えられたもの。このような可能文は、さらに以下の2タイプに分類できる。
 - a. ゼロ代名詞が文脈指示的なもの
 - b. ゼロ代名詞が総称的なもので、対象Yが題目化したもの
 - (ii) 動作主Xが総称的なゼロ代名詞に置き換わり、道具という意味役割を担う名詞句が題目化されたもの。
- ② ①－(ii)のうち、対象Yがゼロ代名詞に置き換えられたものも可能文と解釈できる。
- ③ ①－(i)と自動詞文とは、テキスト中でゼロ代名詞(＝動作主)が想定できるか否かを基準にすれば判別できる。想定できれば可能文、想定できないものは自動詞文である。ただし、両者は意味的に連続しており、同文脈内で判別できない場合もある。
- ④ ③のように、可能文と自動詞文との差異は、動作主が介在しているか否かにみとめられる。介在していれば可能文、介在していなければ自動詞文である。
- ⑤ 自動詞文に用いられる動詞は<－意志性>という意味特徴をもつ。一方、可能動詞は<＋意志性>であるが、それは、動作主に由来するものである。
- ⑥ <状態性>については、強い順に、潜在系可能文>実現系可能文>自動詞文となる。
- ⑦ テンス・アスペクトによる意味的特徴は、可能動詞・自動詞ともに一致する。実現系表現では動作動詞的であり、潜在系表現においては状態動詞的である。

〔例文の典拠〕

本文中で示したもの以外は筆者による。

〔注〕

- (1)寺村(1982:259)は、Cタイプを「受動的可能表現」と名付けた。
(2)井島(1991:184)は、田窪の「総称的ゼロ代名詞」に触れ、こうした概念を用いた分析法は、「(若干拡大すれば)『受動的可能表現』にも適用できるだろう」と示唆している。
(3)このタイプに類する可能文には、(8)のように題目名詞句の意味役割が「道具」であるものの他、次のようなものがある。

〔場所〕(75)a PRO裏庭に布団を干す。

b PRO裏庭に布団が干せる。

c 裏庭は布団が干せる。

〔時〕(76)a PRO春に花見をする。

b PRO春に花見ができる。

c 春は花見ができる。

- (4)これは、必ずしも「その道具をある作業専用の道具としてのみ用いる」という意味ではない。

- (5)益岡(1987:20)を参照。

- (6)これに類した記述は、以下のように、既に鈴木(1965)にもみられる。

「可能動詞は、現在未来形で基本的な用法として、未来における可能性・能力の実現を表わし、潜在的な用法として、現在未来におけるそのような実現の可能性・能力を表わすとみとめることができ…」

- (7)可能動詞の成立について、坂梨(同書)は、抄物資料・キリシタン資料・狂言資料を分析し、次のような考えを示している。簡単に図示すると、

① 四段他動詞 「読む」

類推 ↓

② ①に対応する下二段自動詞 「読むる」 自発>可能 → 自発<可能

↓

↓

③ 下二段自動詞一段化 「読める」 可能動詞

類推 ↓

④ 四段自・他動詞全般 → 可能動詞「行ける・勝てる・押せる」など

(8)命令・禁止・意志の表現（ムードの形式）を形成するか否かのテストにより、動詞の意志性を客観的に判断することができる。命令・禁止は他者への働きかけであり、その表現は、それを受ける相手（聞き手）が命令・禁止に応え従う、あるいは拒否する意志をもち、さらにその意志によって動詞の表す動作・行為の実現が可能である、という場合に限って成立する表現だからである。意志形が意志性に関与するのは自明のことであろう。

ただし、鈴木（1972：320）のいうように、無意志的な動詞が命令・禁止形をとることもあるが、その場合には話者の願望を表す。

(77)雨、雨、降れ降れ。

(9)対象を可能文全般に広げれば、可能表現をとる動詞には、意志性の弱いもの、わずかながらある。今回、『日本語基本動詞用例辞典』（1989 大修館書店）の見出語、異なり語数728語（延べ語数1,402）を対象に調べたところ、これに該当する動詞には、次のような類型がみとめられた。

①心理・感情を表すもの：「諦める・信じる・怒る・悲しむ・喜ぶ」など

②生理的事態を表すもの：「太る・痩せる・生きる・死ぬ・眠る」など

③意志を越えた事態を表すもの：「勝つ・到着する・成功する」など

なお、このうち①に関しては、既に寺村（1982：263）が指摘している。

〔主要参考文献〕

井島正博 1991「可能文の多層的分析」『日本語のヴォイスと他動性』

くろしお出版

ヤコブセン(ウェスリー・M) 1989「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新

展開』 くろしお出版

奥田靖雄 1986「現実・可能・必然(上)」『ことばの科学 1』 むぎ書房

金子尚一 1986「日本語可能表現(現代語)」『国語学・解釈と鑑賞』51-1

久野 暲 1973『日本文法研究』 大修館書店

久野 暲 1983『新日本文法研究』 大修館書店

坂梨隆三 1969「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国文学』46-11

柴谷方良 1978『日本語の分析』 大修館書店

渋谷勝巳 1993『日本語可能表現の諸相と発展』 大阪大学文学部紀要33-1

鈴木重幸 1965「現代日本語の動詞のテンス」『ことばの研究 第2集』

秀英出版

- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
高橋太郎 1991 「寺村秀夫における可能と自発」『日本語学』 第10巻-2号
田窪行則 1987 「統語構造と文脈情報」『日本語学』 第6巻-5号
寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版
益岡隆志 1987 『命題の文法』 くろしお出版
森田良行 1989 『基礎日本語辞典』 角川書店

〔付記〕

本稿は、修士論文の一部を書き改めたものである。現代日本語研究会第18回例会において原案を発表した折には、会員の方々から多数のご意見ご批判を賜った。また、本稿をまとめる際には名古屋大学文学部助手菅井三實先生にご指導を仰いだ。ここに深く感謝申し上げ、併せてご厚情に十分お応えできなかったことをお詫び申し上げたい。

(よこうち みほこ ・ 東京理科大学諏訪短期大学非常勤講師)